

## あとがき

故郷の山が、よごれちゃった。

昨年12月25日に、東京電力福島第一原子力発電所の事故を受けて文科省が測定した、22都道府県の汚染地図が出そろった。福島第一原発から放出された放射性物質が、奥羽山脈や越後山脈そして関東北部山地の高い山々に遮られて、それ以上は遠くに届かなかったようである。2号機の炉心熔融などで、3月14日深夜から15日未明にかけての放射性物質が原因のようである。第一原発から、茨城を南下し、時計回りに関東地方に流れ込み、この時の雨とともに地面に落ちた。公開されたデータを見ると栃木、群馬の北部山間部で汚染が広がったようである。

海の近くで仕事をとおり、ここ東海村を褥に20年近くになるが、不思議なもので望んだ目の前の海原を一向に眺めず、心に山を映す自分がいた。子供の頃は、普段の生活のフレームの端に、必ず山の姿が映り込んでいた。その姿が、どんなに自分の一部になっていたかを離れて初めて分かった次第である。帰郷の際、山々と自分との間の空間が次第に圧縮されてくるにつれて、なつかしい友に会う嬉しさがこみあげてくる。”翠巒影を浮かべては、流水ながき思いあり、紫紺の霞うちわたる、榛名の峰の姿にて、碓氷のたまに身を照らす。” 故郷の山に向かいて言うことなし。

故郷の山が、よごれちゃった。新潟、長野方面への広がりを食い止めるような汚染分布を見ながら、「山々が身をもって遮ってくれたのか」と思う。故郷の山は、許してくれるのだろうか。

よく放映される漫画映画で（このような言い方をすると生まれた年代が分かるが）、こんなセリフがあった。

「土に根をおろし、風とともに生きよう。  
種とともに冬を越え、鳥とともに春を歌おう。」

今、これほどに日本の心情を言い表す言葉が他にあるだろうか。

2012年2月号編集 中村

日本原子力学会核データ部会  
核データニュース編集小委員会

喜多尾憲助（元放医研）、井頭政之（東工大）、石川 眞（原子力機構）、  
岩本 修（原子力機構）、中川庸雄（元原子力機構）、吉田 正（東京都市大学）、  
渡辺幸信（九大）、山野直樹（福井大）、河野俊彦（LANL）、大塚直彦（IAEA）  
中村詔司（委員長、原子力機構） [編集]石橋貞子